

Communicative Competence を目指して

小 山 良 一

There are various kinds of second or foreign language teaching methods advocated, based on different views of the nature of the language and its acquisition. This paper is intended to review the background of one of them called Communicative (Language) Teaching and its possible applications to the class-room English lessons to be taught in Japanese schools.

0. はじめに

唯一絶対に有効な指導法といったものは存在しない、とよく言われるが、それでも我々教師は、与えられた条件下で何とか最大の効果を上げるよう授業改善に努め、適切な指導法を捜している。この小論では、Communication を目的とした英語教育法についてその理論的根拠と、実践面での工夫（願望も含めてであるが）を考えてみたい。

1. 外国語学習の目的

指導法を考える際に重要なことは、まず第一に学習の目的を明確にすることである (Wilkins 1974, 58)。目的としては人によって様々考えられるであろうが Rivers は次の6つを挙げている。

- 1) 外国語学習を通して生徒の知力 (intellectual powers) を伸ばす。
- 2) 文学・哲学の学習を通じて生徒の教養を増す。
- 3) 言語の機能に対する理解を増し、外国語の学習を通して生徒の自分の母

語の機能に対する知識を深める。

- 4) 生徒が現在の研究・情報について行ける読解力を身につける。
- 5) 外国語を学ぶことにより、その言語を話す人々の生活様式・思考様式への共感・洞察力を与え、外国の人々に対するより大きな理解を促す。
- 6) その外国語を話す人々、又はその言語を習得した人々と、口頭又は文書で伝達できる技術を身につける²⁾。

以上の目的を大きく2つに分けて、哲学的教養的目的(1, 2)と、コミュニケーションを目的とする社会的目的(3~6)に分けることができるが、Rivers は、現代のコミュニケーションの急速な発展と、個人レベルでの国際交流の急増により、後者を目的とする言語教育に力点が置かれるべきであるとも言っている²⁾。

日本における英語の地位を考えてみると、第二言語ではなく外国語であり、特に学校教育における英語教育となると、生徒の英語に対する必要性もそうさし迫ったものではない(入試対策を除けば)という現状では、決して前者の目的が重要でないと言うことは出来ないが、従来の英語教育は、そちらに片寄り過ぎていたということは出来るのではないだろうか。従って、前者の目的を念頭に置きつつ、コミュニケーションの目的といかにバランスを保っていくかが問題となろう。カリキュラムにおける英語の占める割合・一クラスの生徒数・教室内外の設備・生徒の動機・教師の週当たりの担当時間数等の教育環境を考慮すると、決して困難な点は少なくないが、しかし本来言葉は伝達の手段であり、教養主義に片寄り過ぎない教育がなされるべきであると考える。

2. Audio-Lingual Method

ラテン語教育に原流をもつ書き言葉中心の伝統的教授法の欠陥を補うものとして、使える言語修得、特に音声面を重視して開発された教授法に Audio-Lingual Method があり、日本でも盛んに用いられた方法であるが、その特色は次の様にまとめられている。

- 1) Language is speech, not writing
- 2) A language is a set of habits
- 3) Teach the language, not about the language
- 4) A language is what its native speakers say, not what someone thinks they ought to say.
- 5) Languages are different

この指導法は、行動心理学を応用したものであり “Foreign-language learning is basically a mechanical process of habit formation” という仮説に基づき、いわゆる pattern drills によって正しい反応のみを学習者が繰り返すことが強化 (reinforcement) となり、無意識にその pattern を学習者が身につけること期待しているものである。また、生徒がその文法事項の意味を理解するのは、分析ではなく、多くの例からの類推によるので、母語による説明よりは、スピーディな反応を繰り返すことに力点がおかれる。

この様な、いわゆる grammatical competence に重点が置かれたドリルに対しては、「機械的繰り返しは、自ら考える意志を無くし、機械的行動を助長し、生徒を inflexible にし、pattern drill ではよくできるが自発的発話につながらない⁹⁾。」「正しい反応をするよう訓練する pattern drill や dialogue memorization は、必ずしも自動的に、様々な状況での fluency につながらない。自分自身意味のある表現をしようという段になって機械的繰り返しばかり訓練されてきた学生はつまづきを示す⁴⁾。」と云ったマイナス面が指摘され、又、生徒の学習意欲に対しても、「long-range goal である最終的な会話能力も、immediate goal である発話の正しさも共にそれ自身では、高校生に長期にわたる退屈なドリルと厳密な音の識別をやらせるに十分な刺激にはならぬ⁹⁾。」「あまりに長期のドリルは生徒には退屈でただ口を動かすだけになるか授業を重荷と感ずるようになる⁹⁾。」のような阻害要素ともなり得る。「究極の目的は言語の自由で自発的使用であり…… pattern-drill level での完全さはそれ自体目的ではない。従って自主的な表現が可能になるまで獲得された技術が

拡張されなければ、不毛な活動である”。』と Rivers が云うように、skill-getting の活動であって skill-using の活動ではない。

3. Communicative (Language) Teaching

Audio-Lingual Method の skill getting から、skill using の面を重視するに到ったのが Communicative Teaching (CT) の基本的考え方と云えよう。もちろん A-L method は言語の実際場面での使用を目的としていないというのではないが、どちらかと云うと個々の項目の修得に力点が置かれ、その結果として自動的に言語使用能力が備わっていくと考えられていた。従って、細かいステップを積み重ね、まず個々の文法項目を独立して身につけ——無意識に口から出てくるまで訓練を続けた後——その後に、既習の知識を使った発展練習をするというのが A-L method の考え方であるが、CT では、creative な言語使用を重んじ、(“Our faculty of language is a faculty of linguistic creativity.”⁹⁾), linguistic form より function を出発点にし、grammatical competence と同様に communicative competence の養成を目的とする⁹⁾。

言語の実際場面での creative な使用能力を身につけるには、文法的に正しい文を作り出す力 (grammatical competence) が必要であることは言うまでもないが、しかし言葉は単文だけ独立して使用されるのではなく、ある特定の状況下で、話者 (又は筆者) の何らかの必要性に応じて発せられるものであるから、単に文法的に正しい文を作り出すだけでなく、ある状況でそれに応じた発話がなされなければならない。例えば、

A: Could you tell me the way to the railway station, please?

B: The rain destroyed the crops.¹⁰⁾

というやりとりで、(B) の発話は文法的には正しいが、communication としては意味をなさない。これ程極端ではなくとも、“Do you have a match?” という問いかけに対して、“Yes, I do.” と答えるだけではやはりコミュニケ

ーションとして十分とは言えないであろう。言語を使用するということは、“as much as a matter of making choices from the grammatical system as of knowing by which forms those choices are realized once they have been made.”¹¹⁾ ということである。

もちろん grammatical competence が何も無いのに、いきなりコミュニケーションと云ったところで無理なことは明白であるが、だからと云って文法体系が全て身につくまで言語使用が出来ないと考えるのは誤りであろう。例えば今流行のワープロの使用を考えてみても、あの部厚い説明書を全部読んでから機械を使おうと考える人はまず居ないであろう、必要最少限の情報を手に入れたらまず機械を使い始めるのではなからうか。そして使っていくうちに必要に応じて新しい機能を少しずつ覚えて身につけていくであろう。言語の場合も同様に、文法書の変化表を全部頭に入れてから本を読もうとする人はいないであろう。

4. CT in classroom

では、学校でこの様な考え方を生かして授業を行なうには、どの様な工夫をし、どの様な点に注意すべきであろうか。

実際の言語使用を伴わない訓練は、mativation の面から学習の阻害要因にもなりかねないし、又、言語を通して表わされる意味も、その発話がなされる状況を見捨てた単なる言語操作によっては明らかにならない¹²⁾ とすれば、communication をしながら grammatical competence も身につけてゆくのが理想であり¹³⁾、母語の修得はまさにそのようにして行なわれる。むしろ、母語と第二言語又は外国語とは、学習者の年齢・環境・必要度その他あらゆる面で異なるので、外国語学習を母語の修得と同じ様にすべきだとは云わないが、できるだけ練習のための練習という要素を少くし、活動のための言語使用という面を多くとり入れた学習を行うべきである。そして学習している言語が使えるものだという認識は生徒の動機の維持にも有効である¹⁴⁾。

これを最も有効に行なう方法として、外国語を使用して他の科目を教えることが提唱されているが¹⁵⁾、これは現実には不可能である。やはり英語の授業では、「英語を」——「英語で」ではなく——教えることが期待されているからである。Brumfit は、母語を使って行なうのと同じ性質の活動を fluency activity、それ以外、言語自体に関心が向いていて評価の対象となるものを accuracy activity と定義し¹⁶⁾、相互に補完的役割を持つとしているが、はたして学校という限られた場面で、fluency activity は可能であろうか。何をやっても本来人工的な活動にしかかなり得ない性格を持つ教室で、「英語を」学習することを目的として、いかにして「英語で」活動する場面を作り出せるかが課題である。そのために有効と思われる活動を、1. 文法・文型のドリル 2. リーディング、3. Writing の面で考えてみたい。

4-1-1 Meaningful Drill

ここで云う meaningful とは言いかえれば、communication が成立するということである。communication とは speaker と hearer との間に何らかの information gap が存在し、両者の gap を埋めていく活動と云える。従って両者の間に何ら gap が無ければ、その発話は「無意味」である。例えば、教師が本を見せて “What is this?” と問いかけ、生徒が “It is a book.” というやりとりはただわかっていることを英語で云っただけで何ら新しい情報が含まれていない。もし教師がそれとは一見してわからない、例えば本の一部だけを拡大した写真を示して同じやりとりが行なわれたとすれば、わずかながらでもコミュニケーションが行なわれたことになる。又、袋の中から多くの品物を出して見せた後、再び袋にしまって、何がはいついたか記憶力を競わせても、実際の言語使用——つまり単に正しい文を発するのが目的ではなく、意味を伝えることが、第一義で、言語はその手段であるという活動に近付けることができる。

4-1-2 Game

ゲームも、人為的ではあるが、それ自体 problem solving な性格を持つので、有効な手段である。

4-1-3 Open Sentence Practice

これは、よく使われる substitution table を、機械的でなく少しでも意味のある活動に近付けようとするものである。例えば

I like | playing the piano. という文型の場合、本当に自分の好きなことだけを云わせるのである。その際、おざなりなことですまないよう target sentence に because / and so... 等、もう一文付け加えさせるようにすると効果的である。

4-2 Reading

高校レベルになると、授業の中心は、Reading Comprehension の色彩が強くなる。これは、生徒の将来英語とかかわる可能性の最も高い活動として、又、一クラスの生徒数が多いという理由で、やむを得ないという面と、望ましい面と両面を持つが、その際にも、単に個々の言語事項を覚えるため、あるいは訳すためではなく、読むことが手段になる、つまり何らかの目的のために読むという視点を設けたいものである。そのためには、生徒に text の内容に対する興味を喚起するための導入と、読後に内容理解と共に生徒の意見や感想も求める check が必要となろう。生徒の知的興味をひく内容の選択が重要である。また、指示に従って実際に物を製作するような教材も欲しいものである。娯楽のための読み物を相当数確保し、自習時間等に評価を考えずに生徒が自由に読めるようにしたいものである。

4-3 Writing

Writing も同様に、単に正しい単文が書けるだけでなく、内容を相手に伝

えるために文章を書くという作業もとり入れるべきである。これにはしかし、2つの問題点がある。伝えるべき内容を持つということと、英語で書くという必要性である。これは他の活動でも云えることであるが、日本人同志が英語で物を書くという必然性は皆無である。どうしても練習のための練習にならざるを得ない。しかし与えられた日本語をただ英語に書き換える作業だけでは、自分で文章を書けるようにはならないであろう。文法の正確さと、伝えられた内容のどちらに重点を置いて評価するかは、実際の指導上かなり判断に苦しむ場合が多いが、思い切って内容に重点を置くことも時に行なうべきではないだろうか。

5. おわりに

現在の学校での英語授業の中で、少しでも *communicative competence* に近付けることを目指した活動の可能性について考えてきたわけであるが、最後に評価について考えてみたい。

今の生徒は評価に対しては実に敏感である。逆に云うと評価に結びつかないことはやりたがらない傾向が強い。従っていくら授業中に *communicative* な活動を目ざしても、テストが *accuracy* を求めるものだけでは、生徒はついてこないであろう。やはりテストでも、単に知識の記憶を問う問題ばかりでなく、*problem solving* な要素を持った、内容の伝達に重点を置いた、*open ended* な問題を加える必要があるだろう。

一方で、矛盾するようではあるが、評価と関係しない活動もとり入れる努力をしたい。ゲームや歌、授業の指示、さらに脱線や余談を英語でやって少しでも楽しんで英語に接する機会を与えたいものである。

註

1) Pivers, W. *Teaching Foreign-Language Skills* p. 8

2) *ibid.* p. 10

- 3) Rivers, W. *The psychologist and the Foreign Language Teacher*, p. 67, 68.
- 4) *ibid.* p. 73.
- 5) *ibid.* p. 58.
- 6) Rivers, (1968) p. 108.
- 7) *ibid.* p. 109.
- 8) Wilkins, D. A. *Second-language Learning and Teaching*, p. 2
- 9) *ibid.* p. 3.
- 10) Widdowson, H. G. *Teaching Language As Communication*, p. 10.
- 11) Wilkins, (1974) p. 35.
- 12) *ibid.* p. 13.
- 13) Widdowson (1978) p. 19.
- 14) Wilkins, *Notional Syllabuses*, p. 13.
- 15) Widdowson (1978) p. 20, Wilkins (1975) p. 84.
- 16) Brumfit, C. *Communicative Methodology in Language Teaching.*, p. 51,

参考文献

- Rivers, W. M., (1964) *The Psychologist and the Foreign Language Teacher*,
The University of Chicago Press
- (1968) *Teaching Foreign-Language skills* The University of Chicago
Press.
- Wilkins, D. A., (1974) *Second-language learning and teaching*, Edward
Arnold
- (1976) *Notional Syllabuses*, Oxford University Press.
- Widdowson, H. G. (1978), *Teaching Language As Communication*, Oxford
University Press
- Brumfit C. (1984) *Communicative Methodology in Language Teaching*, Cam-
bridge University Press

Leech, G. & Svartvik, J. (1975) *A Communicative Grammar of English*,
Longman

Lee, W. R. (1979) *Language Teaching Games and Contests* Oxford University
Press

Harkess, S. & Eastwood, J. (1976) *Cue for a Drill* Oxford University Press

米山朝二・高橋正夫・佐野正之, (1981) 『生き生きとした英語授業』上・下, 大
修館

米山朝二・佐野正之 (1983) 『新しい英語科教育法』 大修館